



**Be Creative**



# 記すのはこれが最後かも 名の横の三年一組十八番

毎年、東洋大学では「現代学生百人一首」の取り組みが開催される。それに倣ってではないが、私もかつては生徒とともに、短歌創作に取り組んだことがある。短歌は俳句より自分の思いを率直に書き表すことができ、「好きなことを綴って、平常点がもらえるなら」と生徒たちも楽しんで取り組んだ。3年生になった生徒たちが「今年はやらないの?」と聞いてきたことがある。「やろうよ。」と言うのである。「平常点はあげないよ。」それでもい



いと生徒たちは言った。現1年生学年主任の日高先生が担任を務めるクラスだった。

生徒たちは1年生の頃より慣れ親しんだ自分自身の雅号を持っていた。「みそ汁王子」は短歌づくりの達人だった。彼の作品は常に多くの生徒の賛同を得、優秀作品に選ばれ続けた。2年生までは、自分が担当する複数クラスの生徒の作品を織り交ぜてのコンクールゆえ、この「みそ汁王子」はどのクラスの誰だかもしれないまま、3年間

が過ぎることになる。3年生の時、私はこの日高先生のクラスしか担当していなかったため、当然一クラスのみでの取り組みとなる。いつも通り、歌集を作り、鑑賞し、自分の好きな作品を選び、それぞれがその作品に一言を添える。雅号を「蜆」と名乗る女子生徒がこう書いた。「1年生の頃から『みそ汁王子』さんの作品に惹かれてきた。この人が一体どのクラスにいるのだろうと思い続けてきたが、一緒のクラスにいるのだと思うと少しドキッとした。」この「蜆」さんも短歌づくりの名手の一人だった。日々の何気ない実践が、生徒たちの心にこうした思いを育てることにつながっていたのだと思うと、何とも言えない思いに包まれた。

ついに「蜆」さんに知らせじまいだったことがある。実は、あなたと『みそ汁王子』は3年間、同じクラスで生活をしていたんだよ。」近くにいながら、思いを遠くに馳せ、緩やかに他者に心をつなげようとしていた彼女の行為に何とも言えない幸せを感じたことは、私にとっても忘れられない思い出である。

さて、標題の短歌は2017年度東洋大学主催「現代学生百人一首」の優秀作品の一つである。卒業を間近に控えた生徒の思いを単純な表現で、率直に、簡潔に、それでも深く表現をしている。卒業に向けてのカウントダウンが始まった。その3年生の一人一人の顔が思い浮かぶ作品である。自由登校の中、それでも朝から学校に来る3年生の諸君は最後の頑張りの時を迎えた。心よりエールを送る。

## 卒業生宇野貴文さんの暖かい心に感謝！

2月5日、あいち銀行の社会貢献の取り組みを通じて、2000年度の本校の卒業生である宇野貴文さんより、高校に物品の寄贈があった。宇野さんは現在、東邦建設の代表取締役を務める。本校の半田先生の同級生でもあり、当時の学年担任団でもあった竹内先生や青木先生にも懇談に加わっていただいた。「学校を忘れずに覚えていてくれてありがとう」感謝の思いでいっぱいである。

